



Title	1930年代の日・中の「歴史」創作について（3） : 「満洲国」言説の知の考古学的分析
Author(s)	伊勢, 芳夫
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 15-27
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/102793">https://doi.org/10.18910/102793</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 1930 年代の日・中の「歴史」創作について (3)

——「満洲国」言説の知の考古学的分析——

伊 勢 芳 夫

## 1. はじめに

前回の「1930 年代の日・中の『歴史』創作について (2)」においては、本論で提案する「歴史」創作とその「正典化」のメカニズムの理論の有効性の検証として *TANAKA MEMORIAL* と *A Manifesto on the Japanese Invasion of Manchuria* という中国で出版された英語による 2 つの印刷物を考察したのであるが、本稿においては、日本側の英語及び日本語による印刷物の幾つかを「知の考古学的」方法により分析することで、1930 年代から敗戦に至るまでの日本の「歴史正典」を再・現前化することを試みる。そして、「1930 年代の日・中の『歴史』創作について (2)」で分析した中国側の「歴史」創作と比較することによって、日・中両国の満洲国に関する「歴史」創作を通して戦われた情報戦（言説レベルの覇権争い）の様態を詳らかにする。

## 2. 欧米列強への配信

そもそも満洲事変から第 2 次世界大戦の敗戦に至るまでの日本は、どのような歴史正典を構築しようとしたのであろうか。それを知る手掛かりとして 1930 年代の日本発の英語／日本語言説における「歴史」創作の調査を試みるのであるが、それにあたって感じられることは大量に存在する日本語資料に対して、世界＝欧米列強に向けて配信された英語資料が少ないことであろう。<sup>1</sup> そのような英語での世界への発信の少なさに関していえば、満洲国建設に至るまでの経緯を歴史小説風に描いた『五色旗』のなかで、満洲事変に関して日本が国際連盟で劣勢に立たされた際、ワシントンやロンドンでの軍縮会議で米英に比べて保有艦の総排水量比率が低く設定されたことに米英に対して不公平感、不信感を抱いていた日本の国際連盟全権大使芳澤謙吉の心の声として「……ひとまづ孤立して身つくるひを

---

<sup>1</sup> その意味で、昭和 10 年（亥年）、戦争へと突き進む日本にやってきたアメリカ人女性である Helen Mears の日本滞在記 *Year of the Wild Boar* がアメリカにおいて当然予想される批判に抗って可能な限り日本人の視点を取り入れようとした点で異色である。Helen Mears, *Year of the Wild Boar: An American Woman in Japan* (J. B. Lippincott Company, 1942). またこの作品については、拙編著『「近代化」の反復と多様性—「東と西」の知の考古学的解体』、(溪水社、2021) の pp. 78-86 を参照。

しなければ、大きく跳躍することは出来ないのだ。」と言わせているように、<sup>2</sup>国内向けには非常に熱心にプロパガンダを発信し続けたのとは裏腹に満州事変や満州国の「正当性」について世界（欧米）に理解を求めることに消極的であったようにみえる。もっとも外務省情報局部の資料をみれば、事変直後は事変の契機が中国軍による挑発行為によるものであり、限られた部隊が満鉄附屬地外に駐留しているのは満州在住の日本人の生命・財産の保護のため、また満州新政府の樹立は民族自決権に則ったものであるという主張を政府としても積極的に行おうとしていた。<sup>3</sup>ただしここではそのような公式の見解や釈明の発信ではなく、情報戦術の一環として行われた実例として——表向きは「満洲国外交部編」（大同元年十二月）というように満蒙人らによって出版発表されたという形になっているが——英語による満州国の正当性を訴える *THE VOICE OF THE PEOPLE OF MANCHOUKUO*（『満洲國民之總意見』）を取り上げ、<sup>4</sup>日本がいかなるプロパガンダによって満州国建設の正当性を世界（欧米）に発信しようとしたかを、詳細なテキスト分析により解明を試みる。

### 3. 1930年代の日本の「知層」構造—英語プロパガンダ

*THE VOICE OF THE PEOPLE OF MANCHOUKUO*（『満洲國民之總意見』）という英文と漢文からなる冊子は満州国外交部によって編纂された、形式上において「満州国の全民衆の声」という体裁をとっており、日本は一切表面上には現れてこない。しかしながらそのことによって、関東軍が満州国建設に中心的役割を果たしたことは周知の事実であるので日本の中国大陆における軍事活動に批判的な当時の読者——そして現代の読者——に日本の影響力の隠蔽を一層強く感じさせる作用があるといわざるを得ない。

*THE VOICE OF THE PEOPLE OF MANCHOUKUO* の英文の“INTRODUCTION”(pp. i-iii)の概要は以下の通りである。

国際連盟のリットン調査団による報告書が満州国において翻訳出版されたのであるが、そこに記載された「誤った、誤解を招く主張(the erroneous and misleading assertions)」に反発した満州国の民衆によってジュネーブに伝えられることを期待して満州国政府の様々な部署に国際連盟への訴えとともにリットン報告書の文言についての意見や反論を書き記した3,300通を超える手紙や電報が送られてきたという。そしてそれらの手紙や電報の送り主の署名の数——漢文の頁の方には、署名の数だけではなく彼ら全員の名前が列挙されている——や、所属民族が列挙されている。その内訳は、署名者の総数が103,005名（1,314団体）にも及ぶ満人、蒙古人、朝鮮人に加え、それ以外にロシア人移民と日本人の学童がそれぞれ1,685人と39人であるという。このように——すべての省と特別区の——満人、蒙古人、朝鮮人、そして白系ロシア人といった民族、仏教徒、イスラム教徒、儒者といった宗徒、農民、商人、及び、それ以外の職種や教育機関の人々が署名者のなかに含まれており、し

<sup>2</sup> 鍵田研一、『五色旗（満洲建國物語）』（吐風書房、1944）、p. 122。

<sup>3</sup> 『満洲事變關係發表集（一）』及び『満洲事變關係發表集（二）』（外務省情報部、1931）を参照。

<sup>4</sup> *THE VOICE OF THE PEOPLE OF MANCHOUKUO* (compiled by BUREAU OF INFORMATION AND PUBLICITY DEPARTMENT OF FOREIGN AFFAIRS, 1932).

たがって満州国の全人民の声を代表していると思ふことができるというのである。

このように送られてきた手紙に強調されている多くの主張のなかで、特に際立って強く主張されているのが以下の 2 点であるという。1 つは、「満州国の人民は、思いやりのある統治を行う新体制を当初から全面的に支持してきた」ということと、もう 1 つは、「満州国の人民は、専制と圧政と重税の旧軍事政権の復帰には強く反対する」というものである。

このような内容の“INTRODUCTION”の後に、満州国政府外交部総長謝介石の国際連盟総会議長エイモン・デ・ヴァレラ(Éamon de Valera)に宛てた手紙を筆頭に、紙幅の都合上、様々なグループや地区を「代表する」手紙の英語版が 9 通のみ掲載されている。そのなかで注目されるのは、「満洲國建國民衆總代表 林鶴杲等」(英文、pp. 6-10)の手紙のなかでの以下の指摘である。

国際連盟の調査委員会による報告書の 6 章において、満州の独立は決して民衆の意志に基づくものではなく、第三国の介入によるものであると断じられている。しかしながら、このような誤った陳述は委員会側の事実認識の不十分さに起因するものであり、したがって以下の根拠に基づき満州国の民衆の名にかけて修正されることをここに要求する：(*THE VOICE OF THE PEOPLE OF MANCHOUKUO*, p. 6)

林鶴杲等の手紙ではこの引用文の後にリットン調査団報告の 6 章の文言への反論として 4 つの根拠が挙げられている。それらの内容を端的に言うと、張学良の圧政に苦しんでいた満州の人民は、「1931 年 9 月 18 日の事変と軌を一にして」、3 省と特別区のそれぞれの代表が民主的に議論を重ねることによって新しい体制を樹立することを決定し、清朝の皇帝であった溥儀に元首を懇請し、快諾されたので満州国を建国した、ということである。しかしながら、いくらその経緯をリットン調査団に説明しても無視されたというのである。

上記以外の手紙においても、満州の地から張学良の圧政を排除し、多民族の代表者による民主的な話し合いによって、アメリカ合衆国、チェコスロヴァキア、フィンランド等のように「民族自決(self-determination)」に基づいて満州国は建国されたのであり、日中の紛争とはほとんど関係ないにもかかわらず、リットン調査団は誤った情報に惑わされ真実をみていないという内容の訴えが繰り返されている。

また、「満洲、蒙古、哈爾濱連合協同組合(The United Cooperative Association of Manchus and Mongols, Harbin)」の手紙(英文、pp. 13-21)では、そのなかで約 950 単語を使って「民族自決」に基づく満州国建国の経緯が歴史的・地政学的に記述されている。その内容を簡潔にまとめると、18 世紀になるとヨーロッパの資本主義国が天然資源の豊かな満州地域に領土的拡張を模索し始めたのであるが、特にロシア帝国にとって「欲しくてたまらないもの」となった。一方「よく知られた事変である『三国干渉』(the well known incident of the “Triple Interference”)によって日本が遼東半島を返還させられ、日英同盟、露仏同盟の後」、多大の犠牲を伴った日露戦争が起こった。[辛亥革命後]清朝の崩壊以来、中国の新中央政府は内政

改善を怠り、諸外国との関係を悪化させた。[そのような情勢において]「日本は、外国の侵略を威嚇し抑止するために満州を防衛の最前線と位置付けざるを得なかった。」一方、張作霖は満州を私物化する有様であった。張作霖は敵と戦い名声を得るために軍拡を行うとともに膨大な無担保紙幣を発行し、満州に多大な経済的損失を与えた。また、威信を維持し、軍閥を抑え込むため資金的に西欧列強に依存した中国中央政府は腐敗していた。[張作霖の爆死後]張学良が跡を継いだ、圧政が続いたのである。そして、「日本に対して張学良が正義の原則を無視し厳粛に締結された条約を踏みにじった」結果、「昨年の秋、限界点(the breaking point)に至った」——つまり、満州事変が起こった——のであるとし、そのことにより、「われわれ（満州地域の人民）の長年の苦しみがついに取り除かれた」という。さらに続けて、今なお国境近辺で張学良の残党や傭兵が襲撃を繰り返しているのも日本の軍隊に制圧をお願いしているが、国家の創成期においては隣の大国の手を借りるものであり、日本やチェコスロヴァキア等もかつてはそうであったという。

以上が *THE VOICE OF THE PEOPLE OF MANCHOUKUO* (『満洲國民之總意見』) の英文箇所概要である。その概要からもみて取れるように、*THE VOICE OF THE PEOPLE OF MANCHOUKUO* においては、繰り返し述べられているリットン調査団の報告書に対する問題点の指摘と満州国建設の歴史的経緯の説明が、日本が主張する満州国の正当性の反復ともいえるべき正当性を根拠とする点に注目されるのであるが、次にそれらの正当性の主張が英語圏の人々に対して何らかの感化力を発揮し得たかを、民衆の声、民族自決、そしてイメージ戦略の3点について検討してみよう。

まず、英文タイトル *THE VOICE OF THE PEOPLE OF MANCHOUKUO* 及び漢文タイトル『満洲國民之總意見』、そして、本文においても繰り返し強調される「満州国民全員の声」についてであるが、そもそも本当に「満州国民全員の声」といえるのであろうか。先述したとおり、満州国の民衆によって満州国政府の様々な部署に国際連盟への訴えとともにリットン報告書の文言についての意見や反論を書き記した 3,300 通を超える手紙や電報がジュネーブに伝えられることを期待して送られてきたこと、そして、それらの署名者の総数が 103,005 名 (1,314 団体) にも及ぶ満人、蒙古人、朝鮮人に加え、それ以外にロシア人移民と日本人の学童がそれぞれ 1,685 人と 39 人であるところの冊子では説明されているが、『五色旗』には、「満蒙には、満洲民族、漢民族、蒙古人、日本人（内地人と半島人）白系ロシア人などが住んでゐるのだつた。そのうち、数の上で一番多いのは漢民族だつた。」(『五色旗』、pp. 184-5) と記されている。客観的にみれば『五色旗』の認識の方が正しいといえるので、*THE VOICE OF THE PEOPLE OF MANCHOUKUO* では意図的に最も多いはずの漢民族を「満州国民全員の声」から排除しているといわざるを得ない。一方日本人に関しても 39 名の日本人学童でもって代表させているのは何らかの意図があったものと推察される。また、手紙の書き手の「視点」に注目するとき、たとえば上記の概要で触れたように、満州国建国の経緯の説明にある「よく知られた事変である『三国干渉』によって日本が遼東半島を返還させられ、日英同盟、露仏同盟の後」や「日本は、外国の侵略を威嚇し抑止する

ために満州を防衛の最前線と位置付けざるを得なかった」のような文言が、果たして満蒙人の視点、彼らの偽らざる心情から発せられたものであろうか。テキストを脱構築的手法で読み直せば、テキストのこのような綻びから明らかに故意に隠蔽された「日本」、したがって「真の作者=日本人」が垣間見えてくるのではないだろうか。

次に、満州国建設における民族自決についてみてみよう。「満洲、蒙古、哈爾濱連合協同組合」の手紙に記述された「民族自決」に基づく満州国建国の経緯について紹介した際、張学良の圧政に耐えかねた人民が「民族自決」の旗印の下一致団結して蜂起し多大の犠牲を払って張学良を追い出し自らの国を打ち建てたのではなく、日本が「昨年の秋、限界点に至った」（満州事変）を建国の契機として評価し、さらに建国後も日本の軍隊に依存していると手紙には書かれてある。つまり、柳条湖事件の後関東軍が怒濤のように進攻し、早々に張学良軍を撤退させ、溥儀を担いで満州国を建国したことを建国の契機として評価し、その後も日本が軍事を掌握することを許容することが、「満洲、蒙古、哈爾濱連合協同組合」が高らかに主張する「民族自決」による満州国の建国ということである。しかしながら、これは欧米の世論に訴えかけるような根拠になっているとは到底いえないであろう。

最後に、*THE VOICE OF THE PEOPLE OF MANCHOUKUO* から読み取れるイメージ戦略についてみてみよう。まず、全体を通してこの冊子に収められた手紙に繰り返し敵役である張学良の満州国建国以前の圧政の過酷さが記述されているが、当時の西欧人の認識においては日本=加害者/中国=被害者であるので、中国から日本へと支配主体が変わっても満州人民への圧政が悪化することはあっても改善されるとは欧米は考えなかったであろう。また、冊子において、ロシア/ソ連の侵略者イメージを強調している点に関しても、「1930 年代の日・中の『歴史』創作について (1)」のなかで解説したとおり、1930 年代の英語の言説においてロシアよりも日本の「侵略者」イメージの方が拡散していたので、満州地域は「欲しくてたまらないもの」というようにロシア帝国の領土的野心を強調してもあまり効果はなかったであろう。したがって、満州建国に係わる中国とロシア/ソ連を悪玉にし、日本をホワイト・ナイトのように印象操作を行う *THE VOICE OF THE PEOPLE OF MANCHOUKUO* のイメージ戦略はあまりにも独りよがり、とても西欧社会の文化の深層を理解して構想されたものとはいえず、欧米列強、特にアメリカ人の心に響くことはなかったであろう。むしろ日本に対する警戒心を増大させるというような逆効果があったのではないか。

以上のような分析から、*THE VOICE OF THE PEOPLE OF MANCHOUKUO* は明らかに情報戦の一環として関東軍のシンパ、もしくは支配下にあった満蒙人たちによって作成されたものと考えられるのである。そのように疑う根拠として「奉天孔學會(The Confucian Institute, Mukden)」からの手紙の一節に、「……リットン調査団の報告書には、委員会は満州国に異議を表明する千を超える手紙を受け取ったと記されている。われわれの細心の調査により、それらの手紙は張学良から金をもらった旧東北大学の学生によるものであることが証明されている。……」(*THE VOICE OF THE PEOPLE OF MANCHOUKUO*, p. 37)とあるように、この冊子はそのような中国側の情報戦術への対抗策であったと考えられる。ゆえに中国側の

プロパガンダに対抗するため、満州国支持こそ満州国住民の総意であるという主張の下に満蒙人や朝鮮人が多数動員され、3,300 通を超える手紙や電報を満州国政府の様々な部署に送らせたのであろうが、しかしながら、実際の人口比率において多数を占めるはずの漢民族の声が排除されているうえに、日本人は目立たないように 39 名の学童のみにしている。これでは、実権を持っていた関東軍／日本の存在を隠蔽しようとしていることが見え透いているので、欧米を説得するどころか、まともに相手にもされなかったであろう。

そもそも満州国建国を正当化しようとしている *THE VOICE OF THE PEOPLE OF MANCHOUKUO* の立案者（≡関東軍）は、欧米人の東洋人観を理解していたとは言い難い。それに対して、中国側はそれを非常にうまく利用しているといえる。すなわち、「1930 年代の日・中の『歴史』創作について（2）」で検証した中国の英文プロパガンダが「黄禍論」に紐づけて日本の「世界征服」に対する警鐘という形をとっているのに対して、満州国／日本の英文プロパガンダは、満州国は民族自決権に基づいた近代的民主国家建設であるとして正当性を訴えているのであるが、当時の欧米の言説形成＝編成においては、前者が黄色人によってもたらされる、より現実的な脅威と見做されるのに対して、後者は欺瞞に満ちた日本側の創作と読み取られたであろう。西欧人にとって、黄色人種と「自由」や「民主主義」の理念は到底相いれなかったと考えられる。とどのつまり、日本のプロパガンディストは、西欧にとっての「他者」としての黄色人（＝日本人）観を理解せず、反中国プロパガンダという単純な情報戦術を使っていたといえるだろう。

次に、1930 年代の日本／日本語の「知層」に関して、日本語資料からみてみよう。

#### 4. 1930 年代の日本の「知層」構造—日本語プロパガンダ

1930 年代の日本語の言説形成＝編成において満州国建設の正当性は日本国民にどのように広められたのであろうか。この節においては、満州国建設までの経緯やその正当性を謳っている『五色旗』と『日本の敵』（第一部満洲篇）の 2 編の小説、そして、満州を舞台に「匪賊」に拉致された日本人女性の救出をテーマとした一種のアクション小説である『暁の大陸』を分析することで、日本語によるプロパガンダの特質を分析する。

最初に取り上げるのは、すでに何度か引用した『五色旗』である。この小説は全知の語り手によって日本人及び中国人の登場人物の言動や心理が描写される第三人称小説の形式でもって、時系列的に満州国建設までの経緯が描かれている。この『五色旗』について、1) 柳条湖事件までの中国政府／中国兵、2) 柳条湖事件に対する日本側の主張、3) 満州国建設に対しての関東軍の言い分の 3 点について簡単に整理してみよう。

まず、柳条湖事件までの中国政府／中国兵についてどのように描かれているかということ、中国政府／中国兵の欺瞞性が際立つようなレトリックが使用されている。たとえば、「1930 年代の日・中の『歴史』創作について（2）」で検証した *A Manifesto on the Japanese Invasion of Manchuria* でも言及されていた「中村大尉虐殺事件」について、『五色旗』では中国兵による殺害を前提としたうえで、中村の殺害を命じた中国軍の「團長代理」の關玉衡と部下と

の会話のなかに以下の引用の關の命令がはめ込まれる一方、その後には日本の記者団に対する「『中村大尉虐殺事件は、調査の結果、日本側の虚構宣傳であることがわかった。』」(『五色旗』、p. 46) という南京政府「外交部長」王正廷の声明が配置されるという具合である。

「今度の事は絶対秘密だぞ。各連長からすぐ連（中隊）へ歸つて兵に言へ。『外部へは斷じて洩らしてはならぬ。俺たち中國人が日本へ行けば、同じやうに殺されるのだ。對外關係を考へて他言してはならぬ』と。いいか？」(『五色旗』、p. 43)

『五色旗』において鍵田研一は全知の語り手の手法を使用しているが、この全知の語り手は中国人同士の内密の会話——場合によっては中国人の心の声（内言）までも——日本語に翻訳し日本人読者に伝えるという設定になっている。もっともこのような手法は中国人の主体的な声を伝えようとする試みではなく、上記の中村大尉虐殺事件に関する中国政府の「日本側の虚構宣傳」という公式見解の前に挿入された「團長代理」の關玉衡の命令のように、中国人／政府の欺瞞性を強調することが意図されたレトリックである。『五色旗』に横溢するこの中国人／政府の欺瞞性は、皮肉にも *A Manifesto on the Japanese Invasion of Manchuria* に蔓延する日本人観（日本人／政府の欺瞞性）と対応するのであるが、日本語の言説編成においては、もちろん前者が真実であり、後者は中国人の言いがかりであるというように解釈されるであろう。このような自民族と他民族を正／負のイメージの二項対立として描く手法は、Patrick Brantlinger が白人による非白人表象の分析で示したように、<sup>5</sup>優勢な「主体」のネガティブな鏡像としての「他者＝劣者」表象であり、この場合においては、日本人のネガティブな鏡像として中国人を描出するといった差別的な異文化表象の事例である。もっとも人種のヒエラルキー構造における白人と非白人との明確な上下関係に対して、中国大陆での日本人と中国人の関係性はさらに複雑であり、単純な優勢者／劣勢者の立ち位置から生まれるものだけではない要素が綯い交ざった感情を帯びたものであったと思われる。たとえば『五色旗』において、中国人の激しい「排日」「抗日」感情によって生存権が脅かされているという意味で日本人の方が被害者だというように描かれている。

日本なんか  
水でもがぶがぶ呑んでゐやがれ  
船に乗つたら  
沈んでしまへ

<sup>5</sup> Patrick Brantlinger は、*Rule of Darkness* で、1857 年に勃発した「インドの大反乱」の記述に共通してみられる傾向を「反乱についてのヴィクトリア時代の記述には、外罰的投影の極端な形が示されている。すなわち、善と悪、無実と罪、正義と不正義、道徳的抑制と性的墮落、文明と野蛮という極端に二極化された言葉を使って懲らしめられた者たちを非難する人種差別的形態がみられるのである。」というように要約している。Patrick Brantlinger, *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830-1914* (Cornell University Press, 1988), p. 200 を参照。



陸にあがったら

足を折つてしまへ（『五色旗』、p. 54）

万宝山事件や中村大尉虐殺事件を水に流して友好関係を築けるように日本の外務大臣と交渉するために張学良の命で外交官の湯爾和が日本に差し向けられるが、幣原外務大臣、さらに南陸軍大臣から素っ気なくあしらわれ、湯はその原因が満州における排日運動であるとする。しかしながらその原因を取り除けるかという、「だが、今になってそのやうな事が出来るかどうか？ 高く燃えあがった排日運動の炎には、張學良自身さへ手が届かなくなつてゐる。」（『五色旗』、p. 53）と彼は絶望的な気分になる。その際、上記の引用の「三四歳の子供までそんな排日歌を高唱」していることを湯爾和が思い出すのである。

『五色旗』において日中関係の悪化を中国政府の排日運動の扇動によるものだと中国側の外交官に認めさせているのは日本側の全くの責任転嫁なのか、それともある程度事実が含まれているのかの判定はこの論稿では行わないが、問題にしたいのは、日本人作家によるこのような中国人の「心の声」の創作が日本人読者によって受け入れられたということだが、中国大陆での戦火の拡大が日本政府／日本軍ではなく中国政府／中国軍の責任であることの暗黙の了解が日本語の言説編成において醸成されていたことの証左であるということだ。そのような文脈において、満州における中国人の排日運動の高まりが伏線となり、南満州鉄道の線路爆破工作へと物語は進んでいく。

『五色旗』における鉄道爆破の記述は、「それは九月十八日の夜の事で、陰曆七日の月はまだもう茫々とつづいた高粱畑のかなたに沈んでゐた。」という描写で始まり、鉄道巡察の演習として4人の斥候の後方を2人の部下とともに虎石台に分屯していた独立守備第二大隊第三中隊づきの河本末守中尉が鉄道線路の上を歩いていた際に事件に遭遇する。

柳條溝[柳条湖]といふ部落のあるところまで来たとき、河本中尉はちよつと立ちどまつて夜空を見あげた。冷えきつて針のやうに尖つた睫毛が、星の光を弾いた。その刹那、後方でズシーンといふ爆音がした。ぎよつとして振りかへると、白く冴えた火柱が幾條も立ち、それより高く吹きあげられた石ころや泥土で空は眞黒だ。

「斥候歸れ。」

中尉は、聲をしぼつて叫んだと思ふと、火柱の方をさして息も吐かずに駆け出した。二人の兵たちもあとにつづいた。

線路の爆破を終へて、そこからあまり遠くない北大營の方へ逃げてゆく、志那兵の黒い影がくつきりと浮きあがつてゐた。中尉はそれを認めると、急に立ちどまつて、

「撃て！」

と命じた。爆破点はすぐその先である。ちらと見やると、軌條が曲つて撥ねあがり、枕木が三本飛んでゐる。（『五色旗』、pp. 60-1）

当時の日本側の公式見解に呼応するように『五色旗』において線路爆破工作は中国兵によるものとされているのであるが、<sup>6</sup>興味深いことに中国兵による爆破工作の直接の描写／創作はここでは回避されている。あくまでも河本中尉の目を通して「黒い影」が目撃されたにすぎない。爆破箇所からあまり遠くない張学良軍の兵舎である北大營の方向にその「黒い影」が逃げていくこと、および、爆破が起こる少し前に河本中尉が部下に語った「……今月になつてからでも、支那人のたくらんだ運轉妨害は九件に及んでゐる。……」『五色旗』、p. 59) という言葉が爆破工作の実行者が中国人であることの根拠として挙げられているにせよ、中国人の心の声も語るこの全知の語り手にしては、「黒い影」という描写に留めているのはあまりにも控えめすぎる感がある。

しかし、たとえ終戦までの日本の歴史正典の柳条湖事件の記述の是非がどうであれ、この事件を契機に満州国建設へと関東軍は邁進するのである。その過程で中国の呪詛のような怒りだけではなく多くの国々からの批判が沸き起こるのであるが、それに対して『五色旗』によれば、日本側の大義としての建国の「大理想」は、満語と日本語で書かれた「建國宣言」の以下のくだりに「結晶してゐる」という。

「……王道主義ヲ實行シテ必ズ境内一切ノ民衆ヲシテ熙々皞々トシテ春台ニ登ルガ如クナラシメ、東亞永久ノ光榮ヲ保チテ世界政治ノ模型トナサントス。」(『五色旗』、p. 216)

このような建国の「大理想」を掲げる一方で、軍事的に列強の一国として英米と対等に扱われないことへの鬱屈した不満が『五色旗』には充満していることがみて取れるのである。たとえば、関東軍の兵士からみて張学良軍の極めて横暴である行動を導いた原因として、「かういふみじめな結果になつたのは、大正十一年のワシントン會議や昭和五年のロンドン會議で狹獐から日本に不利な比率で軍備の縮小を強ひられたからだ。」(『五色旗』、p. 69) という思いが日本兵の口から憤りとともに噴出する。

一方、満州の領有権については、全知の語り手自身が以下のように説明する。

<sup>6</sup> 戦後の日本語の歴史正典においては、関東軍が柳条湖で南満州鉄道の線路を爆破した事件ということになっている。その根拠の 1 つとして、現代史家の秦郁彦の調査・研究が挙げられるであろう。秦は、戦後になって柳条湖事件の真相を明らかにしようと事件の首謀者の 1 人とされる花谷正（中将：最終階級）のヒアリングを実施した。そしてその聞き取りを秦が整理し、花谷正の名で河出書房より「満州事変はこうして計画された」(『別冊知性 第 5 号』 特集「秘められた昭和史」 1956 年 12 月) として発表した。秦はこののち事件に係わった他の軍人のヒアリングも実施したが、秦によれば、その聴取内容からも花谷証言が正確であったことが確認されたという。

また『昭和陸軍全史 1 満州事変』において川田稔は、陸軍省・参謀本部合同の省部首脳會議が「満州での事件内容を調査確認することなく、即座に関東軍の全面出動を是認し、しかも増派まで決定したのである。この素早さは、會議出席者中の主要なメンバーが、それが一八日かどうかはともかく、近々の満州での軍事行動を予想していたことをうかがわせる。」と、満州事変への一連の流れが関東軍及び陸軍省・参謀本部の意向に沿ったものであるとの考えを示している。川田稔、『昭和陸軍全史 1 満州事変』(講談社現代新書：2272)、(講談社、2014)、p. 91。

満洲の土は、日清・日露の兩戦役でながされた皇軍の血で紅に染められてゐる。その血で合法的に獲得した、南満洲鐵道をはじめ一切の權益は、日本が東亞の盟主となつて豪壯な共榮圈を確立するための、最初の手がかりなのだ。かういふ意味から、「満洲」の二字は軍部にとっては生命の名にも等しい。(『五色旗』、p. 85)

日本が「合法的に獲得した」とする満州の領有権を主張する偽りのない根拠は、全知の語り手にとってそのために贖われた日本兵の「血」であり、満州地域の先住民の民族自決を支援するためではない。民族自決を支援するという大義が便法に過ぎないのは、『そこで、僕は提案したいのだが、この度の事變は拙速を重んじて收拾する必要があると思ふ。拾収の方法としては、三千萬民衆を抱きこんだ獨立國家を建設する。民意もそこにありはすまいか?』(『五色旗』、p. 107) という土肥原大佐の言葉からも明白であろう。*THE VOICE OF THE PEOPLE OF MANCHOUKUO* で熱く語られた「民族自決」の大義であるが、土肥原にとっては「拾収の方法」でしかないのである。さらに『五色旗』の末尾に付された「満洲建國年表」のなかにも「九月二十二日 關東軍司令部で事變處理に關する最高會議が開かれ、土肥原大佐が『滿蒙新國家を建設してはどうか』といふ提案をした。」(『五色旗』、p. 255) と明記されており、土肥原大佐／關東軍司令部にとって「三千萬民衆」は日本の付属物にしか過ぎず、満州国の全人民による民族自決に基づくという建国神話は日本語言説においては反復／拡散しなかったと思われる。このように、国内向けの日本語の配信と欧米列強に向けた英語の配信とではダブルスタンダードがみて取れるのである。

以上のように日本人に向けて書かれた『五色旗』では満州の民衆の主体性が軽視されており、關東軍の民族自決を支援するという大義には疑問符が付くが、一方、*THE VOICE OF THE PEOPLE OF MANCHOUKUO* と同様に満州の民衆にとって張學良の統治がいかにか好ましからざるものであったかが強調されている。例えばリットン調査団に対して「翌日から、張學良は全部で五人の調査委員とそのおびたしい随員を國別にして接待しだした。露骨にいへば、或る者には女性を紹介し、或る者には高價な骨董品を贈り、或る者は萬壽山へ案内して、買収の密約をとりかはした。」(『五色旗』、p. 230) というような接待が語られる。もっとも出版が敗戦の前年の 1944 年 12 月である『五色旗』におけるこのような張學良側の腐敗の記述は世界に向けて告発する目的で書かれたのではなく、日本人に中国政府に対する義憤を掻き立てる目的であると考えられる。すでに世界に向けて満州建国の「正当性」を訴えるような言説の発信は断念され、閉ざされた日本語の言説編成のなかで日本国民の戦意発揚に躍起になっていたという状態であろう。

次に、このような満州建国言説の同様の反復の現れの 1 つである『日本の敵』という小説を検証してみよう。<sup>7</sup>

『日本の敵』(第一部満洲篇)は物語を柳条湖事件そのものに絞り、祖国に対する滅私奉公的な価値観をもつ死をも厭わぬ今村上等兵と長澤上等兵の勇猛果敢な戦闘行為が描写さ

<sup>7</sup> 太田清文、『日本の敵』(日本主義文學叢書)、(同盟ペンクラブ、1938)。

れるとともに、中国兵に対する激しい蔑視と怒りの感情が充満した彼らの発言が至る所に鏤められている。そしてそのような日本兵の激しい蔑視と怒りの感情を引き起こす原因である柳条湖事件の直前における満州の状況として『五色旗』と共通して挙げられているのが、「その当時、國際協調主義の方針に據る」日本の外務省の「軟弱外交の足許をみて、次第に増長し暴慢の態度を振舞ひはじめた」中国側の「不法行爲の牽制に心を碎いて、出来るだけ」中国側と正面衝突することを避けていたが、一層募っていく「排日、排日貨の露骨な扇動」、「満寶山事件、中村大尉虐殺事件」等の「挑戦的不法行爲」に、それまで「耐え忍んで抑へてゐた」関東軍の兵士の「民族的公憤と正義感、そして敵愾心は、既に絶頂に達」していたということであった。（『日本の敵』、pp. 2-3）

それが9月18日の夜に突然線路のあたりで爆発音を聞くや否や、長澤上等兵は「……永い間の忍従から立ち上つて、支那兵を懲らしめる時が来た、といふ現實の豫感に胸が熱く燃えて来る思ひだつた。」ということである。（『日本の敵』、p. 12）その長澤上等兵の予感が的中したということであろうか、その直後に「第三小隊」——細かいことを言えば『五色旗』では「第三中隊」と記されている——が「鐵道線路警備中」に、「『……支那兵が、四百米前方の線路を闇に乗じて、爆破し、現場に駆け付けた第三小隊に向つて、先方より一斉射撃を浴せ掛け、……』」、目下中国軍と交戦中であると第三小隊の山崎一等兵により報告される。（『日本の敵』、p. 14）ここでも「闇に乗じて」の工作とあり、はっきりと線路爆破の実行犯が目撃されたわけではない。

その後間髪を入れず日本軍は北大營を攻撃し遂には占領するのであるが、その戦いは、長澤上等兵が戦死し今村上等兵の方も何とか死を免れたが大きな負傷をするほどの激戦であった。その激戦のなか日本兵が極めて勇猛果敢であったことを誇るかのようこの小説でも、「『……六千人の支那兵に我が軍は、僅か四百五十名……』」（『日本の敵』、p. 37）というように原大尉によって張学良軍と関東軍との兵力の差が強調されている。

ここで一旦視点を変えて、満州に生きる日本人の現地人に対する眼差しを読者に対してどのように印象付けようとしたのかを、太田清文と同じく日本主義を標榜する同盟ペンクラブに所属する作家であった青地光弘の一種のアクション小説である『暁の大陸』から読み解いてみよう。<sup>8</sup>青地は純文学小説を志した後大衆文学に転じたが、それに飽き足らず満州事変後の満州を放浪するなかで日本主義に目覚め、国策小説を書くようになった。

この小説の舞台は満州事変後の満州の「四平街」で、南満州鉄道の「繁榮工作」のため地質・地水調査、及び鉱物調査に従事する前野健介の娘のユキが彼女自身地質調査の技術者であったので採鉱地での調査に出かけていったのであるが、そこで消息不明になるところから話が始まる。消息を絶った娘を心配しながらも警備隊に捜査を依頼することを躊躇する前野は、「同志」の呵肅仁と會映祥に相談すると、秘かにユキのことを愛していた呵が一人で探しに行くことを申し出る。そのあたりには張学良が支配した時代の有力者の息子で、「匪賊」の頭目の王達敏が隠れ住んでいた。王は日本に留学もしてかつては親日学生で

<sup>8</sup> 青地光弘、『暁の大陸』、（同盟ペンクラブ、1939）。

日本女性の恋人もいた。しかしながら、日中戦争が勃発するやその女性は悩み抜いた末王から去っていったために、彼は「終生日本を敵とすると豪語して、慌たゞしく歸國」(『暁の大陸』、p. 12) してしまう。最初は張学良の下で日本軍と戦い、張学良の失脚後は「匪賊」となったのであった。そのような王であったが、拉致されたユキに対して葛藤を覚えながらも救い出そうとする。そこに立ちはだかるのは彼の後見人でもある副頭目の張桃克である。王はユキを逃がすために鉄道爆破を画策する。しかしながら、その目論見も張が反対して頓挫してしまう。そのような折、偵察に来た呵が匪賊のアジトを発見し、戻って報告する。報告を受けた警備隊がユキの救出と匪賊の殲滅に向けてアジトに向かい、匪賊たちと激しい戦闘になる。そのさなかに同行した呵がユキを探していると、張に見つかり射殺されるその瞬間、ユキを救い出した王が張を撃ち殺す。その後匪賊は警備隊によって殲滅され、王は逮捕される。ユキや呵は王の命乞いをするが、彼は自ら命を絶ってしまう。事件終了後、ユキの方はというと、この事件をきっかけにして『妾も、なんだか急に女の世界が戀しくなつて來ましたわ』(『暁の大陸』、p. 37) という思いになり、日本に戻り呵と夫婦になることが暗示されるなか、彼とともに日本に帰国するために大連埠頭に行く。

この作品に登場する中国人の人物描写手法は、日本に協力する／しないという 2 項対立的な善悪のカテゴリー化がなされている。もちろん、日本に協力する呵肅仁と會映祥は「善」に、張桃克は「悪」に区分される。

しかしながら白黒はっきりした中国人のなかで王達敏はその 2 項の間を揺れる人物設定がなされており、それゆえ彼の逡巡がこの作品にドラマ性を持たせている。もっとも、「…然し一度歪んだ彼の人生觀には、最早、神の世界を見出す事は困難であつた。彼は益々歪んで行つた。」(『暁の大陸』、p. 12) と述べられていることから、全知の語り手は王の「更生」に否定的だが、しかしながらたとえ「匪賊」であっても「歸順」させることによって日本の協力者にすることを期待するヒロインの方は、王の逮捕後に、「ユキは、この善良な匪賊を、殺し度くないと思つた。否、むしろ今の機會に、立派に歸順させ、時たつてから内地へ、もう一度勉學に遣り度い」(『暁の大陸』、p. 34) と考えて呵とともに彼の赦免に奔走しようとするのであるが、王は以下のように言い、ユキの申し出を固辞する。

「僕は不純です。悪い男です。貴方にそんな風に云はれると、遂、甘へ度くなつて仕舞ふのだ。僕には僕だけの考へもあります。どうか止めないで下さい。では健康と幸福を祈ります」(『暁の大陸』、p. 34)

上記で指摘したように、この作品が反映する当時の日本語の言説編成においては日本に協力することは道徳的善に分類される。したがって、ユキを救出するか否かはまさにモラルチョイスなのである。そして多少の逡巡はあつたものの最終的に王はユキを命がけで守ったわけであるから「善」への移行、つまり日本への「歸順」に成功した筈であるが、拘束された王に対するユキの赦免の嘆願を断り彼は自害する。このことは、一旦「不純(＝

悪)」に染まってしまった過ちを死でもって贖うことにより、王は単に「歪み」を正しただけではなく、過去の汚点を払拭することにより純粋なる「歸順」をなし得たのだと考えられる。

この小説は満州における「共栄 (= 支配)」のプロパガンダであることは明白であるが、上記の日本女性ユキの眼差しは、イギリス人作家によるインド植民地作品に横溢しているような被植民地民に対する「母となり父となり (Man-bap)」の眼差しとは異なった支配／被支配の関係性を前提にしているように思われる。<sup>9</sup> E. M. Forster の *A Passage to India* のようなインド植民地小説にあっても、イギリス人女性がインド人男性と結婚して「女の世界」に入るといったような設定は考えられないであろう。この作品にみられるこのような支配者の眼差しは、支配民族と被支配民族が同じ黄色人種であることが影響しているのかもしれない。

1930 年代、帝国主義列強の唯一のアジア民族である日本は、最初こそ満州建国の「大義」を世界に向けて発信したものの、「西」にも「東」にも属さない／せないまま、「ひとまづ孤立して」(『五色旗』、p. 122)、日本国民を鼓舞するためにのみ敗戦の日までひたすら内に向かって満州建国及び大東亜戦争の「大義」を配信し続けたのである。

## 5. おわりに

「1930 年代の日・中の『歴史』創作について (2)」と本稿において、中国側の英語によるプロパガンダと日本/満州国側の英・日本語によるプロパガンダの比較検証を行ってきたが、日・中双方の英文のプロパガンダの底流に流れる言説は、一方が日本を欧米に流通する「黄禍論」に紐づけて欧米列強に日本の世界征服を訴えるものであるのに対して、他方が(東)アジアの民族自決を正義の御旗とするイデオロギーを標榜する。そして両者のこのような主張を、当時の世界のドミナントな言説形成＝編成のなかで評価がなされたとき、中国は日本軍に虐げられた犠牲者であるのに対して、日本は満州を足場に世界征服を目論む侵略者であるとみなされる。そして、白人優位の言説編成において、日本の大東亜共栄圏イデオロギーは黄色人種による領土的・文化的侵略の危険性を訴える黄禍論の正しさをまさしく証明するものであり、粉碎されるべき対象となった。

次回の「1930 年代の日・中の『歴史』創作について (4)」においては、日・中の情報戦で用いられたレトリックを、情報操作のレトリックの入門書というべき George Orwell の *Animal Farm* を基に検証する。

<sup>9</sup> “Man-bap” は支配するイギリス〔人〕とインド〔人〕の関係をウルドゥー (ヒンディー) 語の母と父を表す言葉を使って言い表した表現であるが、イギリス人植民者の勝手な思いとして Paul Scott の *The Raj Quartet* の第 3 作 *The Towers of Silence* で使用されている。